

外国語活動における省察性の高まりを目指した実践 ～ICT機器・授業支援ソフトや自己分析シートの活用を通して～

中岡 正年

日常的に使う言語とは異なる言語（英語）を学習者（子どもたち）がどのくらい習得することができたのかを確認するためには、子どもたちが客観的に自分の状態を確認し、以前の自分の状態と比較できるようにすることが重要だと考えた。そのために自己分析シートやICT機器・授業支援ソフトを活用した。学習者自身が以前の自分の状態の比較が行えるように活動を動画で継続的に記録したものを視聴しそれぞれの比較、分析を行った。その後、子どもたちの活動観察や実践後の聞き取り調査などを行った。結果として、学習者が積極的に自己分析を行い外国語の習得具合を確認している姿が観察できた。また、多くの子どもたちが今後も外国語をさらに習得したい思いをもっていることがわかった。

キーワード：外国語活動、情報端末、省察性、自己分析

1. 外国語活動における資質・能力

新小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）において、中学年に外国語活動、高学年に外国語科が導入された。平成 30, 31 年の学習指導要領移行期を経て、平成 32 年度から全面实施となる。移行期であるが本校外国語活動部では外国語活動における本質を次のように考えている。

- ①外国語による見方・考え方を働かせ、主に聞くこと、話すこと（やりとり・発表）の言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する。
- ②外国語によるコミュニケーションの中で、物事をどのような視点で捉え、どのように思考していくのかをその背景にある文化、社会、世界、他者との関わりから着目し、コミュニケーションを行う相手・目的・場面・状況等に応じて、情報を整理しながら考えを形成、再構築していく。

また、本校は 2018 年度の研究主題を「未来に生きる働く資質・能力の育成」と設定しており、身に付けさせたい資質・能力を「探究力」と「省察性」の 2 つと捉えている。外国語活動においては、「探究力」と「省察性」を次のように定義した。

「探究力」

外国語やその背景にある文化、社会、世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う相手・目的・場面・状況等に応じて、情報を整理しながら考えを形成し、再構築する資質・能力

「省察性」

習得した知識を自分の生活や文化と関連付けてより深く理解し、情報を精査し、身に付けた思考力を発揮させ課題に対して解決策を考える資質・能力

このように外国語活動における「探究力」とは、いかに相手とコミュニケーションを図り、自国との文化の違いを楽しみ世界を広げることと捉えた。そのために今自分が必要な情報や技能について考え、語彙や表現を習得していこうとする省察性が必要になると仮定し、「探究力」と「省察性」を高め、学習を継続していくには自分が日常において活用している言語とは異なる外国語（英語）を習得したことにより喜び感じられるような授業づくりや自己の状態を認識できるようにする工夫が重要になると考えた。

2. 課題達成に至る手立て

2. 1. 活用教具等について

週 1 回の外国語活動を楽しみにしている子どもたちが多く感じている。そのことは授業後の自己分析シート（感想文）や一学期終了後のアンケートの記述や FLT に対して非常に好感をもっている様子からも感じられる。

外国語活動の授業を行っていく中で、多くの子どもたちが歌や簡単な英語を用いたゲームを通して、徐々に外国語の表現にも慣れてきている。また、日本と日本以外の国の文化の違いや外国語（外来語）や日本語の違いにも興味をもってきているように思われる。一方で、自分の考えや思いを伝えることに苦手意識をもっている子どももあり、日常的に使わない外国語でのコミュニケーションに戸惑いを感じているようである。

これらの現状から、まずは、外国語の表現に慣れることを大切に考え、継続して同じ課題に取り組めば、外国語の習得具合の確認が可能になると考えた。

そこで、1 つ目に、授業ごとに自分の考えや気付きがどのようなものであったか記録し、今後の学習へ活かすために、自己分析シートをファイリングしていくことにした。自己分析シートは「Today's challenge」

「Memo」「Impressions」の3項目にし、「Memo」の欄は空白にし、「Impressions」の欄はリード線を記載した。(図1)

ローマ字は3年生の国語科の学習で習うこと、また「書く」の目標は高学年、外国語の目標であることなどが理由であるが、なにより3年生の子どもたちが感じたことを記述しやすいようにと配慮した。

図1 自己分析シート

また外国語活動の目標の一つが「話すこと」(やりとり)・(発表)であることから、自身の話していることを記録し視聴できるようにする必要があった。そこで、学年で活用している情報端末(iPad)と校務支援ソフトの「ロイロノート・スクール」を活用することを考えた。学習課題に応じて、子どもたちが自らの状態を撮影し、記録を残した。(図2)

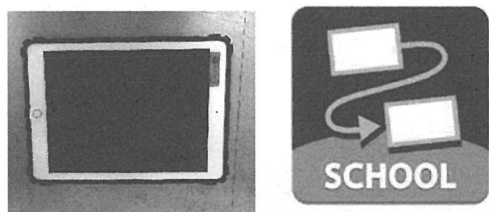


図2 活用機器と授業支援ソフト(ロイロノート・スクール)

2. 2. 仮説と検証方法

以上の取り組みによって、子どもたちが楽しみながら、自身の成長を感じられるように、自身の成長が客観的に確認できるようになることを考え、実践を行った。また、授業者が上記のことを意識し学習を継続することは子どもたちが楽しみながら、自身の成長を客観的に確認し、主体的に学習に臨むことにつながるとも考えた。これらの手立てをもって仮説を検証するために活動分析やアンケート調査、学習者へインタビューなど行い考察を行うことにした。

3. 研究方法

本校の学校提案である「未来に生きて働く資質・能力の育成」をめざすためにも、子どもたちが、日常的にはあまり活用しない外国語を楽しみながら、自身の

学習がどのように習得できているのかを確認できるよう次のように実践を計画した。

- ① 外国語の表現に慣れ親しむ。
- ② 自身の活動を録画する
- ③ 外国語の表現に慣れ親しむ
- ④ 自身の活動を録画する
- ⑤ ②と③の比較を行う

実践後、主に児童観察、自己分析シートやアンケート、インタビュー調査などから、研究の成果と課題を明らかにする。子どものたちのワークシートや成果物をファイリングしたものや ICT 機器を用いて活動や表現を記録したものをポートフォリオとして活用することで、学習前と学習後のコミュニケーションを伴う語彙の量や表現の変化をもって研究の評価を行うことができるのではと考えた。

4. 授業の概要

外国語の表現に慣れ親しみ、子どもたちが自身の成長を比較するために主となる教材として 次の学習を核とした。また、テキストの「Let's Try!」(東京書籍)を用いて系統的に学習を進めていくことにした。

単元計画(全4時間)

単元名

「好きなものをいって、じこしょうかいをしよう!」

第1時 にじをえがこう

- ・さまざまな色の英語での言い方に慣れ親しむ。(知識・技能)
- ・英語と外来語の共通点や相違点に気づいている。(知識・技能)

第2時 すきなもののやすきではないものについて

- ・英語の表現を使った、音声やリズムを聞き取ろうとしている。(態度)
- ・英語と外来語の共通点や相違点に気づいている。(知識・技能)

第3時 インタビューしよう

- ・相手の好みについて知ったり、自分の好みを積極的に伝えたりする。(思考・判断・表現)
- ・好みを尋ねたり、答えたりする英語の言い方に慣れ親しむ。(知識・技能)

第4時 すきなものをいって、じこしょうかいをしよう

- ・英語の表現をつかって自己紹介をしたりする。(思考・判断・表現)
- ・友だちの自己紹介に、興味をもって聞こうとしている。(態度)

第5時間 すきなものをいって、じこしょうかいをしよう

- ・英語の表現をつかって自己紹介をしたりする。(思考・判断・表現)
- ・友だちの自己紹介に、興味をもって聞こうとしている。(態度)

自分の好きなことを伝えるためには何を話せばよいのか。そのためには外国語ではどのように言えばよいのかは、子どもたちに自然と湧き上がる疑問であり、継続して自分の思いや話し方を探究していくのではないかと考え、上記の学習を設定した。そして、第4時間と第5時間に行った「すきなものをいって、じこしょうかいをしよう」の1学期と2学期の学期末に撮影したものを比較し、自身の成長を確認する時間を設けた。

なお、子どもたちの外国語に対しての習得状態は様々であることから、自己紹介の例文は「Let's Try!」の文章を参考にし、全員に配布した。そして、自分のことを照らし合わせて、紹介原稿を作り、話すことにした。さらに必要に応じて付け足しても良いことも子どもたちに伝えた。(図3)

その後に自分の好きなことをテーマに外国語で自己紹介を行う活動を行った。(図4)

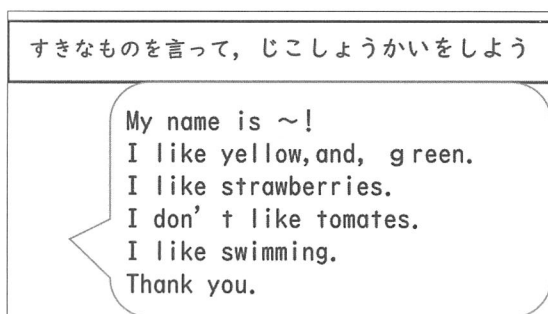


図3 自己紹介の例文



図4 動画の撮影 7月と12月に実施

5. 実践の考察

1学期と2学期に撮影した動画を比較している子どもたちの様子を観察すると自分が普段と異なる言語を用いて思いを表現している様子に大変興味をもっているように感じられた。(図5)

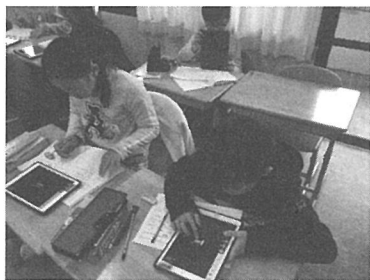


図5 動画を視聴し比較を行う

また何度も動画を視聴する姿から、積極的に自分の成長の変化を見つけようとしているのではとも感じた。1学期と2学期の動画の比較を通して、ほとんどの子どもたちが自身の成長を感じているようであった。

アンケート調査や聞き取り調査を行うことで子どもたちの意見は主に次のように集約することができた。

- ・声が大きくなった
- ・よりスムーズに話せるようになった
- ・メモに頼らなくても話せるようになった
- ・話す単語の数が増えた
- ・発音がよくなった

ほとんどの子どもたちが自身の成長を感じている旨を記述したり、答えたりする結果が得られた。

また、今回の実践の成果として次のこともあげることができる。

学習したことや思考が継続するようにと、自己分析シートをファイルにまとめたことで、そのファイルそのものが子どもたちの学習を支えるツールになっている。また継続的な動画の撮影を行い自身の様子を比較する活動は学習者が自身の成長を客観的にみただけではなく、自然と学習者同士がお互いの成長について確認し、話し合うことになるということである。(図6)

このように動画の視聴から状態を比較し、自己分析を行うことや他者からの評価によって、子どもたちは外国語習得の分析がより明確になり、今後の学習へ向かう意欲も向上したと感じている。



図6 自己分析の場面と学習者同士の相互分析と評価

授業後の子どもたちの感想から、自分自身の成長がよく感じられたこと、自分の習得がどのようなものであるかを認識することができたことにより、今後も、より外国語を習得していきたいという意見が多く見られた。(図7)

以上の結果から本実践において概ね課題は達成できていたと考えている。

大きな声ではいはいえるようにな
ってきているけどもうちょっと大き
な声でいえるようになりたいいて
す。はきりいえるようにもな
れようになりたいです。
もし次にまた外国語でビ
デオをやるなら大きな声で、
はきり、聞こえやすくいえる
ようになりたいなあめて
てとも思いました。むとい
うようなことを言えるようになりたい

じこしょうかいのことで、7月のじこしょうかい
と12月のじこしょうかいを見くらべてみると、
12月のじこしょうかいの方が、聞きとりやす
い声の大きさで、文の長さもちょうどよ
かったです。
はきり点として、もう少しゆっくり言った
方が、聞いている相手に伝わりやすい
と思います。
次、動画をとる時は、上に書いてある
はきり点もふくめて、よりよく相手に伝
わるようにしたいです。

図7 分析シート的一部分の子どもたちの感想

6. 学習者の意識と今後の展望

動画を視聴して比較を行った子どもたちに適時インタビュー調査を行うと、多くの子どもたちが2学期に撮影されたものの方が良かったと回答した。その理由として、(図7)のような理由をあげる者が多かった。

その中に「発音」について言及している子どもがいたが、何度も動画を視聴していることで、自分たちもデジタル教科書の例やFLTの外国語の発音と自身との発音の違いまでに気づくに至ったのではと考えている。

単語の並び方や言い方ではなく、音声による発音の違いまでに考えるに至ったのは、音声だけではなく話す姿も記録することができる動画の特性によるところもあるのではないかと考えている。

自分の好きなことを話したり、尋ねたりする活動の中で子どもたちは自然と自分の思いを伝えたい、また相手にも尋ねたいという思いをもったようである。こ

のことは、1学期の「すきなものをいって、じこしょうかいをしよう」の録画した動画よりも2学期に録画した動画の方が、ほとんどの子どもたちの話し方がスムーズであり、単語数も増えていることから、うかがえる。各時間に用いた自己分析シートの感想文も肯定的に捉えている文章が多く、記述量そのものも多くなっていると感じている。子どもたちのこれらの評価は、自身の感じていることを伝えてみたい、そのためには今より外国語の単語や表現を習得していきたいと感じている表われであると捉えている。

一方、今回の実践を行う中で、お互いにインタビュー形式で行った際の動画も撮影していた。その時にお互いにインタビューしあっている動画と1人で自己紹介を行っている際の声の大きさや表情にも変化があることに気づいた子どもがいた。

これは、相手意識を強く持つために非言語によるコミュニケーションや言葉の強弱の重要性に気づいていることから出た意見であると考えている。(図8)



図8 インタビュー形式でお互いの好きなものを聞きあう活動

低学年や中学年では初めて外国語に触れる子どももいるために、まずは外国語に慣れることが重要であり、話すためにある程度の単語や表現は必要であると考える。しかし、今後は、英語の単語や表現をインプットする際もコミュニケーションを取る相手を明確に意識していく中で、より言葉の習得や意識の向上が見られるのではないかと感じている。そこを意識し、自身の思いをいかに他者に伝えるかという他者意識を強くもたせるよう対象者を明確にし、より実際の場をイメージできるような単元の設定や教具の工夫を行い研究、実践をしたいと考えている。

参考文献

林俊行・水落芳明判・桐生徹・神崎弘範(2012)「小学校外国語活動におけるタブレット型端末の音声認識機能による翻訳活動に関する事例的研究」日本教育工学会論文誌 36 45-48